

王であるキリスト

世界青年の日

第一朗読 サムエル下 5・1-3

第二朗読 コロサイ 1・12-20

福音朗読 ルカ 23・35-43

2025.11.23 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日わたしたちは「王であるキリスト」の祭日のミサをお捧げしていますけども、この「王であるキリスト」の祭日は制定されて今年でちょうど 100 年目ということになります。教会の歴史を考えれば比較的新しく制定された祭日ということになりますけども、1925 年ですね。その年ももちろん今年と同じように聖年であります —— 聖年は 25 年ごとだから、100 年前は聖年。その中でピオ 11 世教皇様が「王であるキリスト」という祭日を制定されたわけなんんですけども、その当時、1925 年あたりがどういう情勢だったかを考えると、教皇様がこの祭日を制定された意図がはっきりしてきます。

第一次世界大戦が終わったあと、人類がそれまでに体験した —— そのあとにもっとすごいものが起るわけなんですけども —— 最も大きなと言ってよい戦争の悲惨な経験を経て、そして、それを教訓として国際社会が平和になっていくのかなあとthoughtたら、全く反対で、それぞれの国が国家主義、とりわけ独裁的なソ連をはじめ、ナチス・ドイツ、イタリアも —— その他の国もそうなんですよね、日本も —— 国家主義とそして全体主義、そういう流れの中で、ほんとに自分の国のことだけっていうような感じで、そういう中で、特にカトリック教会っていうのは国際的な、国と国とをまたいで広がってるから、それぞれの国の中では邪魔者として扱われる。そういうような状況で、しかし教皇様が「まことの平和」っていうのは「まことの王であるキリストに従う以外にないのだ」という信仰と、そしてそれぞれの国家の利害を超えた精神に基づく平和っていうことを訴えられたのが、この「王であるキリスト」の祭日の制定の理由であると言うことができるわけです。

でも、その「まことの王であるキリストに従う」っていうことが、なにかカトリック教会の力を示して「どうだ！」と言って他を威圧するような、そういうような意味での王ではないということが、今日の福音の中でまさに一人の犯罪人の言葉、「われわれは自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。悪いことをしていないにもかかわらず、自分たちと同じ刑罰を受けている」(ルカ 23・40-41)。そういう中に示された。これは単にイエス様の十字架の両脇にいたというこの二人の犯罪人にだけかかるということではなくて、まさに神様から離れたことの中で互いに傷つけ合い、そして苦しみの中にある人類に神様の側から歩み寄るために、ご自分もその同じ苦しみを引き受けられる、あるいはそれに先立ってご自分のほうが苦しみを引き受けられる、そういうイエス様の姿を通して神様に出会い直し、また一人ひとりと出会い直していく、そういうのが「まことの王であるキリストに従う」ということの意味であると言わなければなりません。

簡単に言うならば、わたしたちはまずイエス様と出会うことを通して、イエス様のように、他の人との繋がりの中においては先に愛する——それがどんなに難しいことかということは、イエス様が人類を先に愛するために十字架にまで架からなければならなかつたということで、神様ご自身がご存知である。わたしたちにとってなおさら先に愛するということはいかに難しいか——相手の出方次第ですと思ってしまう。でもその心を乗り越えて先に愛することがいかに難しいか——神様はご存知ですけれども、だからこそ、いつも共にいて、イエス様ご自身が力づけてくださる。その約束のしるしとして、十字架の姿を残してくださっているし、また御聖体を通して一人ひとりの中にいらっしゃるということなんだと思います。

冒頭にも申し上げましたけども、この「王であるキリスト」の祭日は毎年の「世界青年の日」にも当たっているんです。「世界青年の日 (World Youth Day)」というのは何年かに一度世界のどこかの国で行われる大会のことだけではなくて、毎年教皇様が若者たちに向かって語りかける日でもあるし、今年は特に聖年に当たっての若者たちの集いっていうのがローマで 10 月にありました。そのときに教皇様は若者たちに向かってメッセージをお出しになっていきますけども、友として呼んでおられるキリスト

との友情を深めることを通して、わたしたちはお互いの友情、兄弟愛を深めることができ、そして、そのことを通して世の中を神様のみこころに適うものに変えていくという力を得るし、また、そのように呼ばれているイエス様の呼びかけに応えてください、ということなんです。

その中で一つはっとさせられるようなことを教皇様がおっしゃってます。「分裂させるために信仰のことばを用いる人々に従ってはなりません。むしろ、不平等を取り除き、分裂・対立した共同体を和解させる計画を立ててください」。

「分裂させるために信仰のことばを用いる人々に従ってはなりません」。これはよくよく考える必要があると思います。このことはカトリック教会じゃなくて、アメリカのどこか、南部とかの過激なキリスト教の宗派のことなんだと、^{ひとごと}他人事として思っているならば、教皇様の思いは伝わらないんだと思います。わたしたちの中にも、そして他の誰かというのではなく、場合によっては一人ひとりが他の人と自分を隔てる口実として、信仰の言葉を自分に向けて語っているという可能性もあるんじゃないかなあと思います。わたしたちはまさにそういう誘惑、そしてどの言葉に従うべきかということを見抜いていく、識別していく知恵も神様に願いながら、自分の中にある分裂、そして他者との対立、それをイエス様ご自身が示してくださいる友情によって癒していく、その歩みを踏み出す勇気を願いたいと思います。

今日、わたしたちが、この年間最後の日曜日 —— 来週からはクリスマスの準備の期間に入る —— に当たって、それぞれの歩みを振り返り、そしてその中にいろいろな自分自身の課題を改めて率直に受け取ると同時に、しかしその中にすでに共に歩んでおられるイエスご自身の恵みがあったということを、そこにも良かったこともあるということを改めて見出しながら、王であるキリスト、イエス様ご自身の招きに応えていく思いを新たにしたいと、そのための恵みをこのごミサを通して祈り合いたいと思います。